

文福茶釜の話の次手に、狸とは直接縁を引いていないかも知れぬが、在家の炉口に吊るしてあった茶釜の話がある。話の端が、幾分でも狸の問題に触れて来ればめっけものである。

近在で、使用していた茶釜は、最も多く宝飯郡の金屋（かなや）で出来たものと言う。棗（なつめ）形で底に疣（いぼ）が三つ出ている。肩のところに蔓が附いていた。別に丸形の中央が膨れて、腰鏝のある茶釜を文福茶釜と呼んだのである。文福茶釜を使っている家はめったになかった。炉に掛けるに工合が悪かったからである。

前にもたびたび話した、追分の村の中根某の家は、家としても古かったが、炉に掛かっている茶釜がおそろしく古いものだった。形は普通で心持丸型だった。天正時代長篠城三茶釜の一つで、大したものだなどと言うた。近頃になってその家の老人が時々思い出したように、その茶釜を流りに持ち出して磨いているという話を聞いた。今に三〇〇両ぐらいで何処からか買い手が出てくるだろうなどと、一人決めしていたそうであるが、この頃でもやはり炉に掛かっていると云う。

自分の家の近所にも一個古いと言う茶釜を持っている家があった。炉に吊るしてあるところを通りかかった棒手振りが見て、これなら五両まで買うと保証したとかで、大切にしていた。格別見たところ変わってもいなかったが、底に疣がないのが普通の茶釜とちがっていた。

長篠村西組の赤尾某の家は、大して立派な暮らしもしていなかったが、長篠戦争時代から続いた旧家と言うた。この家の炉に掛かっていた茶釜は、戦争当時用いた陣茶釜であると言う。ごく小形のもので、いかにもただの茶釜ではないことは肯かれた。しかし永いあいだ問題にもならずに来たが、家が不如意になって、小さな処に住むようになってから、近くの医王寺の和尚が目を付け出して、大変な熱心でついに主人を口説き落として、永代祠堂金の代に寺へ引き取って行ったと言う。和尚はそれを、前からあった長篠役の遺物の中に加えて、来客に茶を立てたりして珍重していたが、明治三十幾年医王寺の出火に遇って、ほとんど形ばかりになってしまった。寺へ遣ったばかりにあんなことになると、元の持主の老人が、零しているのを聞いたことがある。

長篠城の倉屋敷の跡に住んでいた林某の家の茶釜も、珍しく古いもので、この家で家財整理をした折に、買い取ったものが意外な金儲けをした噂があった。林某の家も旧家で、長篠合戦の勇士の後裔であった。

八名郡山吉田村新戸（あらと）〔現、南設楽郡鳳来町〕の某の家の茶釜も古いものだったそうである。珍しく大きな茶釜だったが、形は変わってはいなかつ

た。湯が沸いてくると、釜の肌色が赤味を帯んて来て、何とも言えぬ光沢が出て来るのが不思議であると言うた。後に主人が床の間に持ち込んで花を活けてあるという話を聞いた。

こうして並べて見ると、古い茶釜の話の家が、どれも旧家であるが、いずれも家運が以前ほどでなくなっていたのである。もちろん不如意になってこそ、自在鍵に掛けられた茶釜も問題になるのであるが、別に茶釜と家の福分とを、結びつけた何ものがあって、こんな話も出来て来るのではないかと思う。茶釜の中に福の神がいると言うて、自分なども幼少の頃からやかましく言われたものであった。「三州横山話」に書いた村の長者の家は、主婦が誤って茶釜に錘（つむ）を当てたために、家の福の神が遁げ出して、たちまち没落したと言っている。今一段と材料を集めて行ったら、福の神の正体が意外な姿を顕して来そうにも思われる。